

不織布の重石

豊川市立中部中・2 なかむら みづき

まだ七月が始まったばかりでセミが鳴いてもいないというのに、その日はひどく暑かった。授業が終わって帰りの会のあと、部活がないので生徒が続々と出ていく。私はそれを眺めながら、熱中症にならないようにできるだけの暑さ対策をしていた。たった一つを除いて。それは、鼻、口を隠すためのマスク。

数年前、新型コロナウイルスが流行し始めた。外出自粛が呼びかけられたり、学校が休みになったりして、私たちの生活に大きな影響と不安を与えた。たくさんの変化があつたが、私にとって最も大きな変化は、マスクをしなければならなかった。最初は感染を防ぐためにしなさいと言われて仕方なくしている感じだった。でも、いつしか私は、顔を隠すためにマスクをするようになった。

それまで見えていた鼻と口、つまりは顔の全貌が見えなくなる。それが長い間続くと、マスクをしているときとしていないときで、自分の顔に対する認識にギャップが生まれる。していないときの自分に自信をもつことができなくなった。マスクをすることで少し安心し、そうしてどんなマスクに依存している状態になる。行事で記念写真を撮るときや、給食の時間が嫌いになった。今までは楽しかったことが、マスクを外さなければなくなると、楽しくなくなつた。

新型コロナウイルスが流行してから約四年が経ち、令和五年。マスクの着用についての見直しがあり、その後、緊急事態宣言が終了した。流行する前の生活に戻ったわけではないが、少しでも平穏に戻ったのは喜ばしいことだ。でも、私は不安だった。マスクの着用の見直しについてだ。私は顔を隠すためにマスクをしている

のだから、流行が緩和されてもつけ続けるのは当然のことだ。もし、周りがみんなマスクを外していたら、マスクをしているのは私一人になつてしまう。そう考えると置いていかれたような気持ちになつて、悲しさと焦りが募る。

今思うと、それまで義務のようなものだったのに、もうしなくても大丈夫、と言われて困惑するのは普通のことかもしれない。でも、当時の私はそこまで考えが及ばなかった。それからは、マスクをしているときの方が呼吸しづらいはずなのに、していないときの方が息苦しく感じていた。単にまだ物心がついていなかったからなのか、これが関係しているのかはわからないが、新型コロナウイルスが流行する前のことをほとんど忘れてしまった。

しかし、最近はずぶしながらもマスクを外すことに慣れてきた。これにはきつかけがある。中学校に通うようになって、授業の内容は難しくなつたけど、新しいことを学ぶことは面白いし、楽しみな行事もいくつかあつた。でもそのうち、同級生の間になんとなく冷たい空気が流れているみたいに感じるようになった。表ではみんな、明るく優しい人のように感じてても、裏では少しじめつとした空気が漂っている気がしたのだ。そこに足を踏み入れると、何をしても誰かの視線が気になつて、何か言われているんじゃないかな、と少し怖くなつてしまう。私はこの空気が苦手だ。苦手なはずなのに周りに合わせてしまう自分。周りと違うことをしたらどう思われるかなんて、ちよつと前まで小学生だった私でもわかる。よくないことだとわかつていても、自分を守るためだと言い訳ばかりしてしまう自分に嫌悪感を抱いた。

けれど、友達みんなは違つた。小学生の頃の友達だ。幼稚園の頃からの仲の人もある。みんなも、多分あの空気に気づいていたと思う。でもみんなは、小学校の時より成長しているのに、優しさは変わっていないのだ。この優しさを信用して、その友達の前だけはマスクを外せるようになった。ほとんど友達のおかげだったけ

ど、私にとっては恐竜みたいに大きな一歩だった。

そんな思いをはせて歩いていると、放課後に遊ぶ約束をする声や、誰かの笑い声が頭に響いてくる。私は西門付近で人混みに埋もれながら、電柱の下で日傘を差し、いつもの姿で待ってくれている友達を探す。普段一緒に帰る友達が集まる頃には、人混みがなくなっていた。早く帰ろう、と文句を言いながらも、話し出すと楽しくて、みんな歩調がゆつくりになってしまう。この空気は嫌いじゃない。友達と楽しく帰ることは必要がないから、マスクを外す。他人に強制されるのではなく、自分から。もう、小学生の時のような息苦しさはない。マスクを外すこと、したくなかったことができるようになるのは、こんなにも幸せなことなんだ。

そう思いながら友達と今日あったことを話して笑い合っていると、何度も見ることがある姿が見えた。目を引く蛍光緑のチョッキを着ていて、右手には光る赤い棒を持っている。私が見たのは、地域の交通安全を呼びかける方だった。この方は私が小学一年生の頃から、登下校の時に通学団の安全のため、後ろから見守ってくださっていた。小学一年生の時はまだ新型コロナウイルスが流行しておらず、マスクをしていなかった。それから流行し、小学校を卒業し、中学校に入學してもマスクをし続ける生活となった。当たり前のことに、小学一年生から中学二年生まで時間が経てば、少しは外見が変わるものだ。友達だったら良いけど、久しぶりに会う人に見られるのは少し勇気がいる。でも、マスクをするほどではないと思えた。挨拶をしたらずぐに友達と話し始めてしまおうと思ったが、私が挨拶をすると、交通安全の方が、

「マスクを外した顔、初めて見たなあ」

と言った。私はその言葉を聞いた瞬間、はっとした。一秒もしないうちに頭の中で浮かんた、今までの自分の姿。その姿は、いつもマスクをしていて、いかにも自信が無さそうだった。私は成長したんだ、と温かなものが心に残る。やっと確かな自信を感じた。この自

信を逃すまいと、自分の手でつかむことができた。しつかりとした、揺るがない自信と、軽くなる心。涼しくて心地よい風が吹く。風に乗って、私は踊るように家に帰った。

友達の優しさに支えられ、地域の方に気づかされた。周りの人の支えがあったから、私はここまで変わった。自分一人だけで、できないことをできるようにするのは難しい。だからこそ、近くにいる人達が応援し、力を貸してあげることが大切だと思う。隣に人がいるだけで安心することだってある。支えられる人も、自分のことを責めないで、最後まで諦めないでほしい。

まだ、人が多いところでマスクを外すことにはためらうけれど、少しは成長できた。これから、どんなことができることを増やし、自信をもっていきたい。あの時、笑って大きく開けた口を隠さなかったように。